九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について

古川, 奈美子
九州大学大学院人間環境学府

北山, 修
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/3586

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.207-218, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2004, Vol.5, 207-218

大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について

古川奈美子　九州大学大学院人間環境学府
北山　　修　九州大学大学院人間環境学研究院

A study of borderline personality traits in relation with parents' rearing attitudes and family atmosphere

Namiko Furukawa (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Osamu Kitayama (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study examined the relations of parents' rearing attitudes and family atmosphere to borderline personality traits. University students (N=278) rated borderline personality traits, their parents' rearing attitudes, and their family atmospheres by three questionnaires. The results showed that there were significant negative relations between parents' emotional - acceptable attitudes and borderline personality traits. It was suggested that not only mother but also father had an effect on borderline personality traits. And, indifferent-severe family atmosphere related positively to borderline personality traits. Furthermore, these relations showed some differences between male and female. In male participants, "abandonment anxiety" had noticeable relation to parents' emotional - acceptable attitudes and indifferent-severe family atmosphere. On the other hand, in female ones, almost all factors of borderline personality traits related to them. However, any factor in borderline personality traits except "instability of feelings" had no difference between male and female. We suggested that this result reflects the features of adolescent rather than borderline personality traits.

Keywords: borderline personality traits, parents' rearing attitudes, family atmosphere

問題と目的

青年期には親からの心理的独立という大きな課題がある。その課題を達成するまでに抱える親への依存・独立の葛藤により，青年は心神状態が不安定になりがちである。そして多くの境界例患者も，青年と同様に，親からの心理的独立が大きな課題となる場合が多い。そこで，本研究では青年期と境界例患者の類似もしくは共通した心的状態に着目し，さらにその心的状態に関連する要因の一つとして，青年の親や家族について考察していく。

境界例と境界例心性

境界例は現在人格障害のひとつと位置づけられている。林（1998）によると境界例の臨床像は非常に多彩であるが，DSM-4を参考にすると，境界例の症状としては，見捨てられることの回避に対する異常な努力，不安定で激しい対人様式，同一性の障害，自傷行為，感情の不安定さ，空虚感，激しい怒りなどが挙げられる。親への依存・独立欲求の葛藤以外にも，境界例の精神力動には青年期の心性と関連があると，多くの研究者が指摘している（神田橋，1970；小此木，1980）。その関連が故に，青年期危機の中に埋もれて境界例として表面化しないことも多い（東山，1998；加藤・濱田・鈴木，1998）。つまり，境界例として顕在化している事例は，一部に過ぎないという可能性も考えられる。

また一方で，一般的な日常生活を送ることができていても，境界例的な症状に悩まされる，具体的に言うと，対人関係でトラブルを抱える，"将来何がしたいのか分からない" など同一性が拡散している，"私はひとりぼっちだ" などの見捨てられ不安に悩まされるなどの特徴を抱えている大学生は少なくないと考えられる。青年期の発達的特徴と混同されやすいと言われる境界例的な特徴について考察していくことは，現代の大学生の心理的苦痛を伴う心的状態を理解していく一つの視点になると思われる。

従って，本研究では境界例心性を「社会的・文化的に逸脱しない範囲ではあるものの，対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴」と定義し，現代大学生の心的理解の一つとして境界例心性という視点からアプローチしていく。

また，境界例には女性が多く見られることから，性差についても検討する。性差が見られる理由の一つとして西園（1988）は，現代女性は生き方が多様化しており同一性の確立が難しいという点を挙げている。境界例という臨床群で性差が見られるならば，大学生の境界例心性にも男女差が見られると考えられる。

親の養育態度・家族の雰囲気と大学生の境界例心性

大学生には限定されないものの，青年期境界例患者の増加には，現代における核家族化と関連があるということが1970～1980年代からさかんに指摘されてきた（西園，1977；鈴木，1989；山田，1988）。なぜ核家族化が境界例と関連があるのかという理由の一つに，西園（1977）が，夫婦の情緒的な触れ合いが薄れた場合，母親がわが子との関係で満足と安心を得ようとして子どもを拘束するために，子どもにおける親からの心理的独立が困難になってしまうという点を挙げている。Gunderson & Lyoo（1997）や Broembsen（1986）らの実証的研究においても，境界例患者は，親が自分の独立を快く思っておらず自分に対して過度に干渉してくると評価しているという結果が得られ，西園（1977）の知見を支持している。つまり，核家族化により母子の関係が緊密となり，母親が子どもの自立を素直に喜べず，子どもの意志にかかわらず無意識のうちに自立を妨げてしまう場合があると考えられる。以上の知見から，境界例は親の養育態度や家族の在り方と強い関連があると考えられる。

そもそも，Masterson（1926）によると青年期において親からの心理的独立に関わる問題が生じるには，再接近期（生後15～22ヶ月）での親の子に対する在り方が関連している。つまり，再接近期において親（多くが母親）が自分自身の情緒安定のためにわが子の分離・独立欲求を支持せず，そのために子どもが抱えた見捨てられ抑うつが独立欲求の高まる青年期に再燃してしまい，症状が形成されるという。従って Masterson の見解を考慮すると，再接近期や青年期という親からの独立感情が高まる時期での親の子どもに対する態度と境界例には関連があると思われる。故に，核家族化により親と子の距離が密接となり，心理的独立が達成されにくくなっている状況が，現代の大学生の境界例心性を強めているという可能性が示唆されると考えられる。

また一方で，青年期は親からの心理的独立が課題になるにもかかわらず，一般大学生においては親に対する依存性の高さが指摘されている。山田（1988）は，特に女子と母親の関係の緊密さを挙げており，この点については多くの研究者から支持されている。

以上のことから考えると，親から独立したいにもかかわらず支持が得られないという点と境界例とに関連があるとされている一方で，あえて親に依存しようとする大学生が現代に多い中で境界例の存在が注目されているという見解とでは一見相違が見られる。そこで，境界例心性を抱える現代の大学生が親の自分に対する態度をどのように捉えているのかという点について検討することで，上記の相違点について考察できる可能性があると考えられる。これまでの境界例心性に関する研究では，一般大学生における境界例心性の様相の検討のみにとどまっており，境界例心性とその親との関係について述べられた知見は見当たらない。境界例とその親や家族との関係の強さは既に指摘されているが，境界例心性とその親・家族の間の関係にどのような関係性が見出されるかについて考察することによって，境界例という臨床群の場合とは異なった新しい知見が得られる可能性があると考えられる。

なお，親からの心理的独立という問題については，主に母親－子に焦点が向けられていた。境界例患者をもつ父親については，境界例の父親は指導性の欠乏が多く見られるという指摘（安永，1970）や，境界例患者とその父親は関係が希薄であるという見解（Young & Gunderson, 1995）が見られる。しかし，境界例患者をもつ父親についての知見は少なく，境界例患者とその父親の関係については母親との関係ほどは明らかにされていないと思われる。しかし，家族の多くは，母親－父親－子どもの三者を主体としており，父親の養育態度に対する評価も考慮すべきであると考えられる。元来，精神分析においては，父親は母親からの心理的独立を促進する役割を担っていると主張されており，その父親の存在が近年改めて注目されている（小此木，2000）。従って，本研究では親の養育態度として母親・父親の養育態度をそれぞれ検討する必要があると思われる。

さらに本研究では，母親・父親の養育態度だけでなく，母親・父親・本人という三者を含む家族全体を包括的に捉える。なぜならば家族は，親と子の関係だけでなく親同士つまり夫婦関係も含み，さらに，きょうだいや祖父母などを含む関係から成る場合が多いためである。青年本人と母親・父親との関係が良好であっても他の成員が険悪な状態にあれば，青年にとって家族は決して心地いいものとはいえない。青木（1966）は，家族の雰囲気が幼少時代において人の行動や精神面の特徴を決定すると述べ，その重要性を指摘している。なお，本研究では，その三者関係を全体的に捉える視点として家族の雰囲気（宮下，1991）を測定することとした。

従って，大学生における境界例心性は母親・父親の養育態度，家族の雰囲気とどのような関連があるのかについて男女別に検討することを本研究の目的とする。また，大学生の境界例心性の性差についても検討する。なお，本研究では4つの仮説を設定する。

1．境界例心性は男子よりも女子に強く見られるだろう。
2．母親の情緒不安定な養育態度や過度に干渉的な態度と大学生の境界例心性は正の関係性があるだろう。母親の支持的で受容的な養育態度と大学生の境界例心性は負の関係性が見られるだろう。
3．父親の指導性が見られず，そして子どもに関心を向けない等の関係の希薄さを示す養育態度と大学生の境界例心性は正の関係性が見られるだろう。

4．家族の冷たい雰囲気と大学生の境界例心性には正の関係性が見られるだろう。

方　法

調査実施時期

平成13年11月中旬に実施した。

調査対象

国立K大学・S大学の学生297名（男子159名，女子136名，不明2名）から回答を得た。そのうち，有効回答者は男子149名，女子129名，計278名であった（有効回答率93.60%）。回答者の平均年齢は，男子20.82歳（*SD*＝6.58），女子20.27歳（*SD*＝1.79）であった。

使用した尺度

境界例心性　大学生の抱く境界例心性を測定する目的で，安立（1999）が作成した境界例心性尺度を使用した。「衝動的である」「この先何をしたいのか私には分からない」「たいてい私はひとりぼっちだと思う」など全35項目から成り，安立（1999）によって「感情易変性・衝動性」「同一性拡散」「対人関係の不全感・低い自尊心」「孤独感・見捨てられ不安」の4因子が抽出されている。評定法については，“全くそう思う”から“全くそう思わない”の6段階で回答するように求めた。

母親・父親の養育態度　宮下（1991）が幼少期から現在までの母親・父親の養育態度を総合的に測るために作成した尺度を使用した。「やさしい－つめたい」「支持的な－支持的でない」「口うるさい－もの静かな」など全30の項目対から成り，宮下（1991）によって「情緒的支持・受容」，「情緒不安定」「支配・介入」の3因子が抽出されている。回答者には母親と父親それぞれについて7段階評定で回答するよう求めた。

家族の雰囲気　幼少期から現在までの家族の雰囲気を総合的に測定するため，宮下(1991)によって作成された尺度を使用した。「厳しい－やさしい」「きちんとした－だらしない」「小心な－大胆な」など全30項目から成り，宮下（1991）により，「冷淡・厳格」「不誠実・無秩序」「内閉・謙虚」の3因子が抽出されている。回答者には7段階評定で回答するように求めた。

手続き

「大学生における自己および家族に対する意識調査」という名目で質問紙調査により実施した。回答者には全て講義の終わりに回答を記入してもらい，記入し終えた順に回収した。

結　果

結果の分析についてはまず各尺度における因子分析の確認を行った。そして境界例心性についてのみ性差の検討を行い，仮説1を検証した。さらに，仮説2－4を検証するために大学生の境界例心性および各因子を基準変数，母親・父親の養育態度，家族の雰囲気をそれぞれ説明変数として重回帰分析を行った（強制投入法）。

境界例心性尺度の因子分析

境界例心性尺度の処理については，“全く思わない”から“全くそう思う”まで1点から6点を付与し，因子構造の確認のため因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。結果はTable 1に示す通りである。その結果，本研究では5因子が抽出された。因子負荷量が絶対値.40以上を有することを条件とし，それ以外の項目は分析から除外した。その結果，計27項目が採用された。全ての因子において，α＝.65以上の信頼性が確認された。

因子の解釈については，安立（1999）とは異なった因子が得られたため若干変更した。第一因子を「6.一体私は誰なのかと困ってしまう」「32.本当の自分が分からない」などの項目から構成され，自己像が不確実で同一性が確立されていないなどの特徴が見られることから「同一性拡散」因子と命名した。第二因子を「3.たいてい私は孤独だと思う」「25.私は周囲の人や物事から見放されている気がする」など周囲に対する無力感や疎外感の特徴を表していることから「見捨てられ不安」因子，第三因子を「23.衝動的である」「26.自分の中に爆発するような感情がある」などの項目から「衝動性」因子とした。さらに第四因子を「4.たびたびゆううつになる」「5.わけもなく喜んだり悲しんだりする」などの項目から，感情が著しく変動する特徴を表していることから「感情易変性」因子，第五因子を「19.自分は他人に必要とされている人間だと感じる（逆転項目）」「24.私は自分自身を尊敬することができる（逆転項目）」などの項目からなり，自分に対して自信がなく過小評価する様子が見られるので「自己の過小評価」因子とした。寄与率の合計は49.13%である。

境界例心性尺度における性差の検討

境界例心性における性差を調べる目的でt検定を行った結果，大学生の境界例心性に差が見られなかった。従って仮説1は支持されなかった。しかし，性差を因子ごとに比較した結果，男子よりも女子に有意に「感情易変性」が見られた（$t_{(276)}$＝2.85, p<.01）。その他の因子には，性差が見られなかった。結果はTable 2に示した。

母親・父親の養育態度を測定する尺度の因子分析

母親・父親の養育態度を測定する尺度の処理については，項目対のうち左側の傾向が強いほど高得点となるように1点から7点を付与し，母親・父親別に因子構造の

Table 1
境界例心性尺度における因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	h^2
9. 私は自分に何かを演じているように自分を見ている	**.80**	−.06	.11	−.19	−.04	.61
8. 最初に会ったときはその人はとても立派に見えてもやがてがっかりすることが多い	**.72**	.20	−.16	−.03	−.34	.62
16. 私の内面は空虚だと思う	**.68**	.04	−.02	−.18	.26	.61
13. 私には相反する二つの感情があるように思える	**.61**	−.32	.30	−.03	.01	.65
32. 本当の自分が分からない	**.59**	−.02	−.04	.06	.23	.59
11. 私はまるで霧の中にいきているようにはっきりしない	**.57**	−.06	.00	.17	.06	.57
14. 私の周りには何か壁があるように思う	**.53**	.10	.06	.12	−.04	.59
6. 一体私は誰なのかと困ってしまう	**.43**	−.21	.04	.37	.09	.58
28. 誰かに好かれることは私にとって難しいことだ	−.04	**.60**	.20	−.05	.02	.61
34. 友人をつくるのは得意なほうだ*	−.17	**.60**	−.14	.07	.08	.64
3. たいてい私は孤独だと思う	.11	**.59**	−.01	.12	.02	.71
30. 私は真の友人をもっている*	−.03	**.52**	−.05	−.15	.07	.38
15. 自分は「一人ぼっちではない」と思うことができる*	−.04	**.47**	−.02	−.03	.16	.58
25. 私は周囲の人や物事から見放されているような気がする	.06	**.46**	.32	.01	.04	.58
20. 人間関係の中に入ると私は自由でなくなってしまうように感じる	.26	**.45**	.02	.06	−.20	.65
21. 私は至るところで失敗している人間だと思い始めている	.04	**.40**	.04	.36	−.04	.61
23. 衝動的である（自分が押さえられない）	−.14	.13	**.75**	−.01	−.08	.60
26. 自分の中に爆発するような感情がある	−.14	.13	**.75**	−.01	−.08	.66
29. 私は自分を傷つけたくなるときがある	.14	.06	**.53**	−.05	.03	.61
33. 無我夢中で乱暴な運転をしたい衝動を感じることがある（我を忘れてさまよい歩きたい衝動を感じることがある）	.16	−.13	**.46**	.05	.19	.50
5. わけもなく喜んだり悲しんだりする	−.12	−.26	.19	**.84**	−.13	.68
2. すぐ感情を傷つけられやすい	−.01	.14	−.12	**.61**	−.05	.61
4. たびたびゆううつになる	−.09	.10	.11	**.58**	.16	.63
35. 理由もなく不安になることがある	−.08	.02	.16	**.54**	.02	.60
24. 私は自分自身を尊敬することができる*	.39	.05	−.01	−.09	**.71**	.71
19. 自分は他人に必要とされている人間だと感じる*	−.18	.36	.11	−.12	**.56**	.64
1. この先何をしたいのか私には分からない	.08	.05	−.24	.27	**.48**	.59
因子寄与率(%)	29.64	6.69	4.82	4.22	3.76	49.13

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ					
Ⅱ	.56				
Ⅲ	.59	.46			
Ⅳ	.68	.56	.53		
Ⅴ	.41	.40	.21	.36	

Ⅰ．同一性拡散　Ⅱ．見捨てられ不安　Ⅲ．衝動性　Ⅳ．感情易変性　Ⅴ．自己の過小評価.
注1）＊は逆転項目

確認のため因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。絶対値.40以上の負荷を有することを条件とし，それ以外の項目は分析から除外した。その結果，母親の養育態度を測定する尺度については23項目が採用され，父親の養育態度を測定する尺度については29項目が採用された。また，信頼性については α =.80以上の十分な値が確認された。

因子の解釈については，母親・父親ともに第一因子を，

Table 2
境界例心性および5因子の平均値と標準偏差および t 検定の結果

	男子	女子	t 検定
同一性拡散	23.53(8.33)	23.39(7.54)	.15
見捨てられ不安	25.43(6.91)	24.78(6.37)	.82
衝動性	11.60(4.33)	11.29(4.30)	.60
感情易変性	12.97(4.15)	14.33(3.74)	−2.85**
自己の過小評価	11.43(2.70)	10.84(2.79)	1.77†
境界例心性	108.05(25.57)	108.22(25.27)	−.06

注1）男子 n=149　女子 n=129
注2）括弧内は標準偏差
注3）**p<.01　†p<.10

Table 3
母親の養育態度を測定する尺度における因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	h^2
26. 公平な ― 不公平な	**.70**	−.04	.52
13. 信頼する ― 信頼しない	**.67**	−.04	.47
21. 平等な－不平等な	**.66**	−.01	.44
3. やさしい－冷たい	**.64**	.00	.41
22. 安定した ― 不安定な	**.64**	−.07	.45
23. 無視する ― 重視する	**−.64**	−.18	.36
14. 個性を尊重する ― 個性を尊重しない	**.63**	−.20	.53
24. にこやかな ― 無表情な	**.63**	.12	.36
4. 肯定的な ― 否定的な	**.58**	−.24	.50
30. 拒否的な ― 受容的な	**−.57**	.27	.51
16. 支持的な ― 支持的でない	**.53**	−.11	.34
17. 子ども中心の ― 大人中心の	**.48**	−.08	.27
25. いい加減な－きちんとした	**−.47**	−.23	.19
18. ばらばらした－一貫した	**−.44**	−.01	.19
8. 口うるさい ― もの静かな	.07	**.72**	.49
29. しつこい ― さっぱりした	−.05	**.64**	.44
7. でしゃばりな ― 謙虚な	.00	**.60**	.36
6. 拘束的な ― 解放的な	−.17	**.55**	.41
19. 指示的な ― 非指示的な	.09	**.55**	.28
20. こせこせした ― おうような	−.19	**.54**	.40
12. 厳しい ― 甘い	−.03	**.52**	.28
27. 保護的な ― 自由な	.20	**.48**	.20
28. 統制的な－非統制的な	.15	**.48**	.20
因子寄与率（%）	26.08	10.25	36.33
因子相関行列		Ⅰ	Ⅱ
	Ⅰ		
	Ⅱ	−.36	

Ⅰ．情緒的・受容的態度　Ⅱ．支配的・干渉的態度

「3.やさしい－冷たい」や「30.受容的な－拒否的な」などの項目対の左側の意味から，子どもの積極的に受容するような特徴が見られるため「情緒的・受容的態度」と命名した。また，第二因子については「6.拘束的な－解放的な」や「19.指示的な－非指示的な」，「8.口うるさい－もの静かな」などの項目対の左側の意味から，子どもに対して支配的で口うるさく干渉するような特徴が見られるため，「支配的・干渉的態度」と命名した。寄与率の合計は，母親の養育態度が36.33%，父親の養育態度が41.45%である。結果はTable 3，4に示した。

家族の雰囲気を測定する尺度の因子分析

家族の雰囲気を測る尺度の処理については，母親・父親の養育態度を測定する質問紙と同様に，項目対の左側

Table 4
父親の養育態度を測定する尺度における因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	Ⅱ	Ⅲ	h^2
23. 無視する ― 重視する	**−.80**	−.19	.56
5. 意欲的な ― 無気力な	**.75**	.37	.46
26. 公平な ― 不公平な	**.71**	.01	.49
25. いい加減な－きちんとした	**−.66**	−.22	.37
16. 支持的な ― 支持的でない	**.65**	−.10	.49
13. 信頼する ― 信頼しない	**.64**	−.16	.52
21. 平等な－不平等な	**.64**	−.07	.46
3. やさしい－冷たい	**.62**	−.18	.51
22. 安定した ― 不安定な	**.61**	−.15	.48
14. 個性を尊重する ― 個性を尊重しない	**.58**	−.26	.53
24. にこやかな ― 無表情な	**.58**	.04	.31
18. ばらばらした－一貫した	**−.57**	−.06	.30
30. 拒否的な ― 受容的な	**−.53**	.21	.42
4. 肯定的な ― 否定的な	**.52**	−.34	.54
17. 子ども中心の－大人中心の	**.47**	.00	.22
9. 意地の悪い ― お人よしの	**−.41**	.35	.41
6. 拘束的な ― 解放的な	.04	**.75**	.54
8. 口うるさい ― もの静かな	.04	**.69**	.46
29. しつこい ― さっぱりした	−.01	**.67**	.45
7. でしゃばりな ― 謙虚な	.05	**.63**	.37
19. 指示的な ― 非指示的な	.29	**.62**	.32
28. 統制的な－非統制的な	.22	**.61**	.31
27. 保護的な ― 自由な	.19	**.57**	.27
20. こせこせした ― おうような	−.12	**.56**	.38
10. いらいらした ― 落ち着いた	−.33	**.50**	.50
12. 厳しい ― 甘い	−.02	**.48**	.24
15. 感情的な ― 理性的な	−.06	**.48**	.26
1. 自律性を尊重する ― 尊重しない	.29	**−.45**	.39
2. 開放的な ― 閉鎖的な	.20	**−.45**	.32
因子寄与率（%）	29.90	11.55	41.45
因子相関行列		Ⅰ	Ⅱ
	Ⅰ		
	Ⅱ	−.42	

Ⅰ．情緒的・受容的態度　Ⅱ．支配的・干渉的態度

の傾向が強いほど高得点となるように1点から7点を付与し，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，宮下(1991)と同じ3因子が抽出された。絶対値.40以上の負荷を有することを条件とし，それ以外の項目は分析から除外した。その結果，28項目が採用された。信頼性については，α =.85以上の十分な値が確認された。

因子の解釈については，宮下（1991）と同じ因子が抽出されたため，そのまま第一因子を「冷淡・厳格」，第三因子を「内閉・謙虚」とし，第二因子は宮下（1991）

Table 5
家族の雰囲気を測定する項目についての因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2
1. 角のある―丸い	**.85**	.05	−.03	.67
6. 厳しい―やさしい	**.81**	.28	−.16	.48
2. おだやかな―厳しい	**−.75**	−.12	.08	.46
3. 暖かい―冷たい	**−.69**	.07	−.09	.58
11. かたい―やわらかい	**.66**	.19	.13	.46
8. 短気な―気長な	**.64**	−.02	−.17	.34
5. 気持ちよい―気持ち悪い	**−.60**	.11	−.08	.48
7. 素直な―強情な	**−.52**	.17	−.09	.43
10. 信じやすい―懐疑的な	**−.52**	.05	.05	.27
4. 自分勝手な―思いやりのある	**.48**	−.33	.02	.48
13. きちんとした―だらしのない	.02	**.83**	.08	.66
14. まじめな―ふまじめな	.02	**.78**	.06	.52
15. 慎重な―軽率な	−.02	**.78**	.15	.58
16. 勤勉な―怠惰な	.06	**.75**	.05	.51
18. 不正確な―正確な	.07	**−.73**	.01	.59
12. 不注意な―注意深い	−.14	**−.72**	−.06	.45
19. 不潔な―清潔な	.23	**−.44**	.07	.36
17. 無能な―有能な	.02	**−.43**	.27	.33
26. 小心な―大胆な	.06	.03	**.79**	.66
23. ひかえめな―でしゃばりな	−.24	.16	**.70**	.39
27. 臆病な―勇敢な	.03	−.16	**.69**	.59
25. 個性のない―個性的な	.22	.10	**.67**	.60
24. 無口な―おしゃべりな	.10	.10	**.67**	.49
21. 外向的な―内向的な	.09	.14	**−.63**	.42
30. 内面的な―外面的な	−.09	−.09	**.57**	.31
22. 孤独な―社交的な	.11	−.28	**.53**	.54
29. 派手な―地味な	.12	−.25	**−.52**	.24
28. 冷静な―情熱的な	−.06	.12	**.46**	.18
因子寄与率（%）	25.50	11.33	7.80	44.63

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ			
Ⅱ	−.40		
Ⅲ	.47	−.28	

Ⅰ．冷淡・厳格　Ⅱ．誠実・秩序　Ⅲ．内閉・謙虚

の「不誠実・無秩序」の因子名を参考にし，本研究では「誠実・秩序」と命名した。寄与率の合計は44.63%である。結果はTable 5に示した。

母親・父親の養育態度,家族の雰囲気と境界例心性の関連（Table 6参照）

母親の養育態度と大学生の境界例心性の関連　男子・女子ともに境界例心性を基準変数，「情緒的・受容的態度」因子・「支配的・干渉的態度」因子を説明変数として，それぞれ重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果，男子においては母親の「情緒的・受容的態度」と境界例心性に有意な負の関係性が見られ（$\beta=-.20$ $p<.05$），「支配的・干渉的態度」とは有意な正の関係性が見られた（$\beta=.16$，$p<.10$）が，その関係性は弱いことが示された。なお，これらの2因子により男子の境界例心性の分散のうち7%を説明できた（$R^2=.07$，$p<.05$）。女子においては，母親の「情緒的・受容的態度」と境界例心性に比較的強い負の関係性が見られた（$\beta=-.45$，$p<.001$）。またこの母親の2因子により女子の境界例心性の分散のうち20%を説明で（$R^2=.20$，$p<.001$），比較的高い説明力をもつことが示された。以上の結果より，男子については仮説2は支持されたと言えるが，女子については「支配的・干渉的態度」と境界例心性に関係性が見られず，仮説2は一部のみ支持された。

さらに，境界例心性の各因子を基準変数として男女別に重回帰分析を行った。その結果男子において，母親の「情緒的・受容的態度」との有意な関係性をもつのは「見捨てられ不安」（$\beta=-.39$，$p<.001$）と「感情易変性」（$\beta=-.20$，$p<.05$）であったが，その他の因子については有意な関係性は見られなかった。一方で，母親の「支配的・干渉的態度」との有意な関係性をもつのは「同一性拡散」（$\beta=.18$，$p<.05$）「衝動性」（$\beta=.24$，$p<.05$）であった。なお，母親の養育態度に関する2因子により男子の「見捨てられ不安」の分散のうち14%を説明できた（$R^2=.14$）。しかし，その他の「自己の過小評価」を除いた因子においては，説明率が$R^2=.05$以下であり説明力は弱いことが示された。

一方，女子においては，男子と異なり，母親の「情緒的・受容的態度」は全ての因子に有意な負の関連性があり，$\beta=-.24\sim-.40$と男子よりも比較的高い数値が得られた。また，説明率でも「同一性拡散」「見捨てられ不安」「自己の過小評価」の3因子において$R^2=.13$以上の値が得られ，各因子においても比較的説明率が高いことが示された。

父親の養育態度と大学生の境界例心性の関連　男子・女子ともに境界例心性を基準変数，父親の「情緒的・受容的態度」「支配的・干渉的態度」因子を説明変数として，それぞれ重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果，男子においては父親の「情緒的・受容的態度」因子にのみ，境界例心性と有意な負の関係性を持つことが示された（$\beta=-.25$，$p<.01$）。また，この父親の養育態度を示す2因子により男子の境界例心性の分散のうち8%を説明できた（$R^2=.08$，$p<.001$）。また，女子においても父親の「情緒的・受容的態度」と境界例心性の比較的強い負の関係性が示された（$\beta=-.39$，$p<.001$）。またこの父親の「情緒的・受容的態度」「支配的・干渉的態度」因子により，女子の境界例心性の分散のうち20%を説明でき（$R^2=.20$，$p<.001$），比較的強い説明力をもつことが示された。以上の結果から，関係の希薄さに通じると思われる「無視する－重視する」などの項目が含まれた「情緒的・受容的態度」と境界例心性は有意な負の関係性が見られたので，仮説3は支持されたと言える。

さらに，母親の養育態度の場合と同様に父親の養育態度についても，境界例心性の各因子を基準変数として男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果，男子においては，母親の場合と同様に，父親の「情緒的・受容的態度」と比較的強い関係性が示されたのは「見捨てられ不安」（$\beta=-.41$，$p<.001$）であったが，その他の因子では有意でなかったり，弱い関係性をもつものであった。説明率は「見捨てられ不安」のみ$R^2=.17$（$p<.05$）が得られ，比較的高い説明力を持っていることが示されたが，その他の因子では$R^2=.05$以下と説明力が弱かった。

一方，女子においては，「感情易変性」以外の因子において父親の「情緒的・受容的態度」と有意な関係性が示されたが，$\beta=-.22\sim-.34$と関係性がある程度うかがえた。一方で，父親の「支配的・干渉的態度」と境界例心性については，全ての因子において有意な関係性は見られなかった。説明率は，「衝動性」以外の因子でそれぞれ$R^2=.10\sim.12$の値が得られた。

家族の雰囲気と大学生の境界例心性との関連　男子・女子ともに境界例心性を基準変数，家族の雰囲気の「冷淡・厳格」「誠実・秩序」「内閉・謙虚」因子を説明変数として男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果，男子においては家族の「冷淡・厳格」な雰囲気のみ境界例心性と有意な関係性が見られ，その関係性は比較的強いことが示された（$\beta=.32$，$p<.001$）。また家族の雰囲気を構成する3因子により，男子の境界例心性の分散のうち12%を説明できた（$R^2=.12$，$p<.001$）。

女子においては，家族の「冷淡・厳格」な雰囲気と境界例心性に比較的強い有意な関係性が見られた（$\beta=.36$，$p<.001$）。また「内閉・謙虚」な雰囲気と境界例心性に負の関係性が見られたが，この関係性は弱いものであった（$\beta=-.18$，$p<.05$）。また家族の雰囲気を構成する3因子により女子の境界例心性の分散のうち20%を

Table 6
境界例心性とその各因子を基準変数，母親・父親の養育態度および家族の雰囲気を説明変数とした重回帰分析結果

		境界例心性		同一性拡散		見捨てられ不安		衝動性		感情易変性		自己の過小評価	
		M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
母親の養育態度	Ⅰ	−.20*	−.45***	−.01	−.35***	−.39***	−.40***	−.03	−.30**	−.20*	−.24**	−.16	−.37***
	Ⅱ	.16†	.01	.18*	−.09	.02	−.04	.24*	.02	.01	−.01	−.06	.03
	R^2	.07**	.20***	.02†	.14***	.15***	.14***	.05**	.08**	.03†	.04**	.01	.13***
父親の養育態度	Ⅰ	−.25**	−.39	−.13	−.34***	−.41***	−.34***	.02	−.22*	−.19*	−.11†	−.01	−.31***
	Ⅱ	.09	.08	.03	.06	.03	.02	.14	.01	.11	.06	.21*	.10
	R^2	.08**	.15***	.01	.12***	.17***	.10***	.01	.03*	.05*	.02*	.03*	.11***
家族の雰囲気	Ⅰ	.32***	.36***	.13	.35***	.39***	.25**	.40***	.33***	.22*	.16†	.08	.23*
	Ⅱ	−.12	−.05	.06	−.02	.03	−.04	.16	−.07	.13	−.09	.08	−.05
	Ⅲ	−.01	−.18*	.03	−.10	.02	.26**	.34***	−.05	−.05	.18†	.08	.22*
	R^2	.12**	.20***	.01	.12***	.20***	.16**	.17***	.10***	.05*	.07†	.01	.12*

母親・父親の養育態度　Ⅰ．情緒的・受容的態度　Ⅱ．支配的・干渉的態度.
家族の雰囲気　Ⅰ．冷淡・厳格　Ⅱ．誠実・秩序　Ⅲ．内閉・謙虚.
注1）*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

説明でき，比較的高い説明力であった（$R^2=.20$，$p<.001$）。以上の結果から，仮説4は支持されたと言える。

そして，さらに境界例心性の各因子を基準変数として，男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果男子においては，家族の「冷淡・厳格」な雰囲気と，男子の「見捨てられ不安」「衝動性」「感情易変性」に有意な正の関連性が見られ，$\beta=.22\sim.40$と関係性がある程度見られた。また家族の「内閉・謙虚」な雰囲気と，男子の「衝動性」に有意な正の関係性が見られた（$\beta=.34$，$p<.01$）。説明率が「見捨てられ不安」で$R^2=.20$，「衝動性」で$R^2=.17$の値が得られ，比較的高い説明率が得られたが，「感情易変性」については，$R^2=.05$と説明力は弱いものであることが示された。

一方で，女子においては，家族の「冷淡・厳格」な雰囲気に対し全ての因子において有意な正の関係性が見られたが，「感情易変性」以外は$\beta=.23\sim.35$以上の関係性であることが示された。説明率においても「感情易変性」以外の因子において，$R^2=.10$以上の値が得られた。

考　　察

境界例心性の性差について

境界例心性には性差が見られず，男子よりも女子の方が境界例心性は強いという仮説は支持されなかったが，因子ごとの比較では「感情易変性」が男子よりも女子において強く見られた。

境界例患者は，多くの研究者によって女性の方が多いとされている。一般青年の境界例水準の不安を取り扱った稲苅・小川（1993）の研究でも，「本当の自分が分からない」など同一性に関する項目や，「自分は必要のない人間であると感じたことがある」など自己の存在の揺らぎに関する項目や孤独感に関する項目において，女子が男子よりも強いという結果が得られている。

しかし一方で，本研究で用いた尺度を作成した安立（1999）による，一般大学生を対象とした研究では境界例心性に男女差が見られなかったので，本研究はこの結果を支持したと言える。本研究の取り扱った境界例心性は，青年期の発達的特徴とも共通点があるため性差が見られなかったとも考えられるが，稲苅・小川（1993）と異なる結果が得られており，境界例心性の質的な理解を深めるためにも今後さらに検討していく必要があると思われる。

なお，「わけもなく喜んだり悲しんだりする」ように感情が変化しやすいという「感情易変性」は，男子よりも女子に強く見られたが，佐藤・鈴木・青木・東谷（1990）の研究結果では，20−25歳の女性は男性よりも情緒が不安定になりやすいことが示されていることから，女性に見られる発達的な特徴とも考えられる。しかし，一方で「感情易変性」因子内の項目には，“わけもなく”感情が変化したり“たびたび”憂鬱感を感じたりなど頻発性が感じられないこともなく，発達的な一過性の状態であるか否かは今後検討していく余地があると考えられ

る。

境界例心性と親の養育態度の関連

境界例心性と母親の養育態度　男子については，幼少期から現在までの母親の“やさしい”“支持的な”養育態度と大学生の境界例心性には負の関係性が見られたが，境界例心性の中でも特に「たいてい私は孤独である」「周囲から見放されているような気がする」といった見捨てられ不安との負の関係が示された。母親が信頼に値する存在であるという基本的信頼感を幼少期に抱くことができた場合，青年期を迎え心理的独立を迎える時期に至っても，自分は一人ではないという感覚をもつことができると考えられる。しかし，母親が“拒否的な”もしくは“不安定な”養育態度であると感じられ，その基本的信頼感を得ることができないまま大学生になると，孤独感や見捨てられ不安を抱えてしまう可能性が考えられる。

また，母親の“口うるさい”“指示的”な養育態度と，男子の境界例心性には弱い関係性が見出されたが，特に男子の“自分の中に爆発するような感情がある”など抑えがたい衝動性との関係性が示された。心理的独立が達成されつつある大学生にとって，母親が支配的・干渉的であることは時として疎ましく感じられることがあると思われ，発達的な現象とも考えられるが，しかしこの衝動性因子の中には“私は自分を傷つけたくなるときがある”という，自傷行為につながる可能性が否定できないような臨床的問題を示す項目も含まれており，発達的側面だけでなく臨床的側面から捉えていく必要があることが示唆された。

一方で，女子については母親の支持的・受容的な養育態度が境界例心性と関係があるという結果が得られたが，境界例心性の中でも特に見捨てられ不安に強い関係が見られた男子とは異なり，女子においては境界例心性の全因子と比較的強い関連が見られ，母親の養育態度の女子の境界例心性に与える影響が比較的大きく多面的であることが示された。このような結果が出た理由の一つには，母－娘関係の密接さが挙げられると考えられる。山田（1988）によると，男子よりも女子の方が母親と共に語り合う話題も多く，自己開示度も男子より女子の方が大きく上回っているという。母親の支配的・介入的な養育態度と女子の境界例心性に関連性が見られなかった理由の一つとして，女子大学生と母親が普段から親密であり母親がたとえ干渉的であったり指示的であると感じても，一過性の感情であり特に気にしないといった傾向があると考えられる。

境界例心性と父親の養育態度　元来境界例患者を対象とした研究では，母親との関係がより注目され，その父親について言及されることは少なかった。先述したように，Young & Gunderson（1995）らの，父親は青年に対してより否定的であったり誤解していたりするという見解や，日本では安永（1970）の指導性の欠乏が多く見られるという指摘があったが，境界例患者に及ぼす影響は母親と比較するとあまり強くないとされていたように思われる。一方で本研究の結果から，男女ともに父親の養育態度と境界例心性が関係性をもつことが示され，臨床群である境界例と対照的に一般大学生の境界例心性には父親の存在が重要であることが示唆された。

まず，男子においては父親の情緒的で受容的な養育態度が境界例心性に関係していることが示されたが，その中でも特に見捨てられ不安に関係が強く見られた。境界例心性の各因子のうち，見捨てられ不安のみに関係性をもつという点は母親と同じであった。また，父親の支配的で干渉的な態度と，「自分自身を尊敬することができない」など自己に対しての評価の低さに弱い関係性が見られた。男子にとって，父親という存在は母親と同様に情緒面でも重要な役割を担っていると思われ，たとえ一緒に過ごす時間が母親より少なかったとしても，大学生がもつ父親へのイメージや評価は境界例心性に影響力を持つと考えられる。一方で父親が口うるさく干渉してきたり指示的であったりすると，個の確立がすすみ自分の意思で動いている男子にとっては，否定されたような気になると考えられる。また，男子にとって父親は同性であるため，自我や将来像のモデルになっているとも考えられ，その父親からの支配的・干渉的な態度は，自尊心を低めてしまう結果につながると思われる。深谷（1990）は，現代青年の抱く父親像は，リーダー性だけでなく母親的なあたたかさも備えている，両性具有的な父親像であることを指摘している。故に，子にとって母親と同様に父親の影響も大きく，そして，その父親は強くて頼りになるだけでなく身近であたたかい存在であると言える。

ところで女子に関しても，父親の養育態度への評価と境界例心性の関係性の在り方は，母親の場合と近似しており，その関係性の度合いも比較的強く，多面的であった。加藤（1976）によると，女子が共にいるときに安定感を得られるのは断然父親よりも母親であるが，一方で，困った問題が生じた場合には父親を頼ることが相対的に高くなるという。青年期になると身体の生理的変化により，心身ともに不安定になりがちである。また受験などの大きな障害があったり，自分の将来について不安や迷いなどが生じやすくなる。こうしたときには職業人としての父親を頼ることも多くなり，そこで自分の考えや意見が受容・支持されれば，同一性の拡散や見捨てられ不安が生じる程度も最小限で済み，結果的に境界例心性の度合いも低くなると考えられる。境界例心性の因子ごとに検討すると，父親の情緒的・受容的態度が女子の同一

性の拡散や自己の過小評価を軽減する傾向が見られたが，さらに見捨てられ不安や衝動性が緩和される傾向も見られた。以上の結果から，母親の養育態度と同様に父親の養育態度についても関連性の強さが示唆されたが，大学生の抱く母親と父親の養育態度の評価やイメージは質的に異なっていると考えられ，より詳細な検討が必要であると考えられる。

境界例心性と家族の雰囲気　家族の冷淡・厳格な雰囲気と大学生の境界例心性は正の関連があるだろうという仮説は支持された。つまり男子・女子ともに，例えば“角がある”，“厳しい”，“冷たい”と認知されるような冷たく厳しい家族の雰囲気と大学生の境界例心性に関連があることが明らかになった。これは遠藤（1998）の，家族の温かく調和的な雰囲気が子どもの発達の背景として重要であるという見解を支持するものであるといえる。たとえ，両親それぞれが子どもに対して優しく振舞ったとしても，例えば夫婦の不仲や世代間葛藤などで家族の雰囲気がぬくもりに欠けていたならば，それは子どもの心神状態に大きく影響するだろう。

さらに因子ごとに検討した結果，男子において，控え目で内向的な家族の雰囲気と衝動性に負の関連があるという結果が得られた。境界例家族はたびたびコミュニケーション不足が指摘されているが，“無口な”“内向的な”という形容には口数が少ないという意味が含まれているとも考えられる。従って，おとなしく控えめな雰囲気をもつ家族は，口数が少なくコミュニケーションに乏しいという可能性も考えられるため，そのような雰囲気の中では，男子学生は“自分の中に爆発するような感情がある”と思っていても家族の中でぶつけることができずに未消化なままで残っているとも考えられる。

まとめと今後の課題

大学生の境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気の関係性を検討した結果，親の情緒的で受容的な態度は境界例心性を軽減する傾向が見られ，家族の冷淡で厳格な雰囲気と境界例心性は正の関係性が示唆された。また，大学生の境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気の関係性のあり方は，男女で異なっていた。

本研究では，大学生本人の心的現実を重要視し，大学生が幼少期から現在までの親の養育態度・家族の雰囲気をどのように捉えているかという評価を取り扱った。今後は母親・父親など他の家族成員の視点も取り入れ，それらの視点と青年本人の評価の相違なども考慮しながら，境界例心性を抱く大学生とその親や家族について詳しく考察していく必要があると思われる。また，大学生の境界例心性については，本研究では性差についての考察にとどまったが，境界例心性と臨床群である境界例との差異が伺えたので，今後さらに境界例心性の様相について様々な視点から検討していく。

引用文献

安立奈歩　1999　青年期の境界例心性に関する研究　心理臨床学研究，**17**(4)，354-365.

青木邦子　1966　接触様式から見た親子の親近感情　教育心理学研究，**14**(2)，24-38.

Broembsen,F.V. 1986 Separation crisis in family with a borderline adolescent *The American Journal of Psychoanalysis*, **46**(1), 62-75.

遠藤利彦　1988　乳児期の発達　下山晴彦(編)　教育心理学Ⅱ　発達と臨床援助の心理学　第2章　東京大学出版会　Pp.43-68.

深谷和子　1990　子どもの中の父親像・母親像―二人親の時代へ―　児童心理，**44**(12)，36-41.

Gunderson,J.G. & Lyoo,I.K. 1997 Family problems and relationships for adults with borderline personality disorders *Harvard Review of Psychiatry*, **4**(5), 272-278.

林 直樹　1998　境界例の入院治療について　河合隼雄　成田善弘（編）　境界例　日本評論社　Pp.71-87.

東山弘子　1998　学生相談にみる境界例　河合隼雄　成田善弘（編）　境界例　日本評論社　Pp.71-87.

稲苅千恵・小川捷之　1993　内的崩壊感尺度作成の試み―境界例水準の不安に関する考察―　上智大学心理学年報，**17**，55-64.

神田橋條治　1970　境界例の治療　精神医学，**12**(6)，26-31.

加藤志ほ子・濱田庸子・鈴木範子　1998　学生相談における境界例とのかかわり　心理臨床学研究，**16**(1)，1-11.

加藤隆勝　1976　青年期における自己意識の構造－3－自己の独立性・依存性についての検討　東京教育大学教育学部紀要，**22**(3)，109-116.

Masterson,J.F. 1926 *From borderline adolescent to functioning: the test of time.* New York: Brunner / Mazel Publisher. 作田勉（訳）1982　青年期境界例の精神療法：その治療効果と時間的経過　星和書店

宮下一博　1991　青年期におけるナルシシズム（自己愛）的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係　教育心理学研究，**39**(4)，455-460.

西園昌久　1977　対人関係論　精神医学，**19**(12)，4-19.

西園昌久　1988　甘えの二重構造―母子関係理論への提言―　精神分析研究，**31**(5)，261-273.

小此木啓吾　1980　青年の精神病理2　弘文堂

小此木啓吾　2000　父性の役割　アディクションと家族，**17**(2)，149-154.

佐藤泰一・青木繁伸・鈴木庄亮・東谷圭子　1990　自覚

症状などの加齢による変化―THIによる成人女性集団の断面調査から― 民族衛生, **56**, 26-46.
鈴木 茂 1989 現代社会の中の境界例家族 精神医学, **31**(6), 623-632.
山田順子 1988 青年期の母子関係 心理学評論, **31**(1), 88-100.
安永 浩 1970 境界例の現在 精神医学, **12**, 492-99.
Young,D.W. & Gunderson,J.G. 1995 Family images of borderline adolescents *Psychiatry*, **58**, 164-17.